

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

日教組宮城県ボランティアに参加して

第1ターム 7月19日(火)～7月23日(土)

大分・兵庫・長野・広島4県から各4人ずつ参加 本部1人(男性14人、女性3人)

活動場所 石巻市内の公立学校

活動内容 教育復興活動(学校の施設・設備の復旧や学習活動の支援など)

<はじめに>

石巻の町に入ると、屋根がわらの破損、地盤沈下や道路のひび割れ、潮水に浸かり閉店したままの店舗など、被災の爪あとがそこら中に転がっていた。それでも町の至る所には「がんばろう石巻」の横断幕がかかげられ、石巻の人たちの復興への強い思いを感じた。

私たちの活動場所の小学校についていたときは、靴箱の前のスペースで1学期の終業式が行われている最中だった。この学校も地域の避難所になっており、体育館は使えない。震災当時は300人ほどが避難生活をされていたそうだ。今も体育館には、行き場のない被災者の方が70人ほど居られるとのこと。この猛暑の中、さぞ暮らしにくいだろうと心が痛んだ。

校長先生の話によると、自分の家族が被害にあったり家が流されたりした教職員も、みんな必死で被災者の方たちの対応をされ、やっと5月23日に1学期の始業式ができたそうだ。そんな中で、「先生方は大変疲れている。とにかく休ませてあげたいのです。」という校長先生の強い思いをお聞きして、できることを精一杯お手伝いさせていただこう、と心が引き締まる思いがした。

<作業1日目>

運動場の側溝の清掃作業。台風突風に煽られながらの作業で、砂がまいあがる。側溝のコンクリートブロックの蓋を開け、汚泥を袋につめる。私たちの立っている腰のあたりまで海水が来ていたそうだ。怖かっただろうなど、背中が冷たくなる気がした。

作業を始めたころは、なかなか上手くいかなかったけれど、午後になると要領も分かってきたことやチームワークもできたことで、とてもスムーズに作業できるようになった。通りがかりの人に、「ボランティアの方ですか。ご苦労様です。」と声をかけられると、「こんなお手伝いしかできなくて…」と、かえって恐縮した。



### 〈作業2日目・3日目〉

午前中は学習支援ということで、各学年に入り子どもたちの学習を支援する。先生や子どもたちはどうされているのか…一番気がかりだったこと。子どもたちはおしゃべり好きでよく笑う。計り知れないほどの思いをしながらも、何事もなかったかのようにみんな明るい。先生たちの努力と配慮が、この明るさを引き出しているのだろう。校長先生が回ってこられ「おう、頑張っていますね。」「一人で来たんか。」などと声をかけられると、嬉しそうに笑う子どもたち。子どもたちも先生方も明日に向かって歩み出している。



なんだか嬉しくなった。



※楽しいプール

午後からはプール監視補助と清掃活動に別れての作業。

プールサイドの敷きブロックは地震のため、そこら中が浮きあがったり陥没したりして、とても危ない。それでも、子どもたちを泳がせてやりたいとの思いから、先生方が汚泥や砂を取り除き、土嚢を積んでなんとか泳げるようにされたと聞いた。忙しい中での、大変な作業だったと思う。



この日は、気温25度・水温17度、泳ぐには冷たすぎる。それでも子どもたちは楽しみにやってくる。高学年の子が小さい子の面倒をよくみて、とても仲がいい。にぎやかに泳いでいるプールのそばの運動場では、中学校の校舎を建てる作業が始まった。

※ 広い校庭にも中学校の仮設校舎が建ちます。

すぐ隣にある公園も、介護施設の仮設の建設がはじまっており、子どもたちが体を動かして遊べる場所はない。せめてプールで思いっきり遊ばせてあげたいという先生たちの優しさが、子どもたちを笑顔にし、元気付けていると思った。



※公園の広場は仮設を建てる場所に

2日間、泳げない子どもたちの指導でプールに入っていた先生は、ほんとに冷たかったと思う。でも、泳げるようになって『ありがとう』といって帰る子や『孫のために最後まで見てくださってありがとうございます。』と嬉しそうに帰っていかれるおじいさんの姿を見て、お手

伝いできて、本当に良かったと話しておられた。

作業チームには、急遽、学校のご近所の庭や玄関・道路掃除の依頼が入った。台風で、運動場の砂が大量に流出し、それを取り除いてほしいということだった。この時も通りがかりの人が「ありがとうございます。」と声をかけてくださり、少しでもお手伝いできたことが嬉しかった。

### 〈終わりに〉

精一杯のお手伝いをしようと思って参加したけれど、私たちにできた事はほんの少しでしかない。それでも、私たちのバスが見えなくなるまで見送ってくださった、中里小学校の先生方の姿に、胸が詰まる思いがした。

たいしたこともできなくて、もどかしい思いでいっぱいなのに、日教組本部の大杉さんは、「第1タームの活動は、本当の意味でのボランティア活動ができたと思います。」と言われた。第1タームの私たちが学校や地域の方とのつながりを作ることが、第2・第3タームと、より充実したボランティアができることにつながるということらしい。



※送られた鈴虫の音色が教室に涼やかさを

頑張っておられる先生方とお会いして、直接のお手伝いはたくさんできなかったけれど、今私たちができることを精一杯することが、共に頑張るといことなのだ、改めて思い直したボランティア活動だった。



※全国から送られてきた支援物資・励ましの手紙に、全校でお礼の手紙を書いて送られていた。大変な数だが、先生方は、心のつながりを大切にすることを、子どもたちの中に育てているのだなあと感じた。